

さあ、いよいよ最終回のテキストです。

でも、これで、終わりと言うわけではありません、ここからが本当の「書くこと」の始まりと思ってください。最初はもちろん、エッセイを書いています、その先は、恋愛小説、推理小説、歴史小説、未来小説、フィクション、ノンフィクション、童話、ファンタジー、長編小説、舞台脚本、映画脚本、詩、詩歌、なんでもありです。もちろん、エッセイも、随筆も。

まずは、書くことの楽しさ、表現することの面白さ、そして、自分を観照する心のポジションの持ち方を是非、学習、理解して、実践し、体験してみてください。

たぶん、それは、生涯ずっと続けられる、もっとも、人間らしい楽しみの一つなのだと思います。

【第4回】のテキスト目次

愛や人生に、しっかりふれてみよう

口調・語調とはなにか

文体・スタイル／漢字の多用・開き方

自分史とエッセイ

幼い頃のこと／時系列でみた自分／成長とはなにか／幸せとは、感謝とは

段落のつけかた

段落で話の意図をまとめる／間を取ることの大切さ

平易な言い回し

自分の言い回し／難解な言い回し／難しいことほど簡単な言い回しで

はやり言葉、若者の言い回し

時代性のあるもの／雰囲気醸成

くどい文章とは

同じことを繰り返す意味／主題と外れたこと
／強引に結論を導こうとしている箇所

心の温かさが残るエッセイ

夢と希望に満ちたもの／優しさの伝わるもの／喜びの伝わるもの

余韻の残し方

全部言わない／想像できることは言わない／感情を説明しない

形容句の位置を変えてみる

かかりの問題／否定形を使う危険性／明解な指示語

ことわざを使う場合の注意

ことわざの意味を確認する／ことわざの良し悪し／難しいコトワザ

しっとりとした味わいのあるエッセイ
落ち着いた心の表現／語尾の語感／心地の良い人生の見かた

引用文の使い方
効果を良く考えて／著作権／引用・出典・礼儀／正確に

上手く書けないところの処理
場所を変える／言い方を変える／削除する

作品の磨き上げ
朗読してみる／身近な人に読んでもらう／批評を聞く

心を込めた最終チェック
あらゆる人になってみる／愛が発信できているか／将来の自分も嬉しいか

(宝彩有菜)

第4回テキスト 宝彩有菜

【第4回】 愛や人生に、しっかりふれてみよう

【401】 口調・語調とはなにか

(文体・スタイル)

批評家などが、よく、「この小説家の確立された独自の文体が、云々」とか、この流れるような文章のスタイルとか、言います。

確かに、夏目漱石には、夏目漱石の、森鷗外には、森鷗外の文体やスタイルがあります。芥川龍之介、三島由紀夫にもそれぞれ独自の文体やスタイルがあります。

ですから、「そうか、私も、独自の文体を確立しなくてはいけないなあ。さて、どんな、文体や、スタイルにしようか」などと、思ってしまうかもしれませんね。

でも、自分のものは、考えれば考えるほど、分らなくなります。一体、自分の文体やスタイルは、どんなものなのだろうか、ああでもないし、こうでもないしと、さっぱり、わかりませんね。もし分かったとしても、今度は、それで良いのかどうか分かりません。

実は、そのようなものを、無理に考え出したり、確立しようとしなくていいのです。意図しなくていいのです。

文章をたくさん書いていくうちに、自然に、自分の書きたい方法やスタイルになっていきます。あるいは、言い方を替えれば、もともと持っていた漠然とした文体なり、スタイルが次第に明確な形になって表れてくると言ってもいいです。

ですから、最初から、私は、このような文体で行こうとか、このようなスタイルにしようと、「頭」で考えなくて良いと思います。

文体やスタイルは全然気にしない。

それで良いと思います。

結果として、なんとなくこんな文体だなあとか、こんなスタイルだなあと自然に分ってくるだけのことです。

また、現れてきた文体があったとしても、それは単に、著作人生では途中経過であって、さらに書いていけば、さらに、変化していくかもしれません。

(漢字の多用・開き方)

漢字を多く使うか、ひらがなを多く使うかで、文章の感じが変わってきます。カタカナ言葉を多く使うかどうかでも、随分感じが変わってきます。

「彼女は、そこで、躊躇した」

「彼女は、そこで、ためらった」

「彼女は、そこで、ヘジテイトした」

同じようですが、少しずつ違いますね。

「彼は、とても、幸福だった」

「彼は、とても、幸せだった」

「彼は、とても、ハッピーだった」

これも、同じようですが、少しずつ違いますね。

著者としては、言いたいことをしっかり、言わなければなりませんから、自分の言いたいことに、ぴったりの表現を選択しなければなりません。しかし、言いたいことを言っても、伝わらなければ、意味がないですから、今度は、どれが一番伝わるか、つまり、易しい言葉かということも考えなければなりません。

伝わる量というのは、いわば「ぴったり度」と「易しさ」の掛け算ですから、例えば、「ヘジテイト」が表現としてはぴったりだと思っても、多くの人に理解できない単語、あまり使われていない表現であれば、それは、伝わる量を最大にするのが良い表現だという意味で言えば、成功とはいえませんね。

それよりは、「ぴったり度」を少しさげて、「易しさ度」を少し上げた方が結果としては良いのだということです。

また、読みやすさや、見た目の柔らかさのために、近年は、漢字を「開く」ということがよく行なわれています。

例えば、上記を、漢字を開く前の書き方で再度書いてみると、つまり漢字が多い書き方で書くと、次のようになります。少し、重い感じになりますね。

(漢字の多い書き方)

「又、読み易さや、見た目の柔らかさの為に、近年は、漢字を「開く」という事が良く行なわれています。」

これは、本来、「日本語」であったものを、「漢字」を当てて書き表していたのをやめて、平仮名で表す方法だと言ってもいいですね。もともとが漢字表現のものを「開く」ことは、あまりありません。

ただ、全部、開いてしまうと、ひらがなが長く続くようになって読みにくい場合は、一部開かないで、漢字のままにして置くということもたまにあります。

上記を例にすれば、

「漢字のままにしておくということもたまにあります」

「漢字のままにしておく事もたまにあります」

というように、ひらがなが長く続いている文章の途中に漢字を、故意に配置するという事です。音読すると、同じですが、見た目は違いますから、その辺りも注意してみてください。

【402】 自分史とエッセイ

(幼い頃のこと)

幼い頃のことを思い出して文章にすれば、どんな、ことも、きっとすぐに素晴らしいエッセイになります。それは、何年も何年も熟成されたワインのように、香りもコクも豊かに練成されてきているからだろうと思います。

芳醇なワインの味わい。

もう一つは、その時の自分と、今の自分は、もちろん同一人物ではありますが、まるで他人のように遠く離れていますから、自分のことなのに、ごく自然に、客観的に見れるからだろうと思います。

つまり、良いエッセイの一つの基本的な視点である、「客観的に見ている」ということが、幼い自分に対しては、わりと自然にできるということがあるのかもしれない。

さらに、幼いとき、小さいときの自分を書くときには、とても懐かしい気持ちが満ちてきますが、その、なんともいえない幸福感が書くときの文章に微妙に良い影響しているのではないかと思います。

たとえ、辛い思い出であっても、そこを通過してはるかに時間が経過していますから、その思い出も、懐かしさや、ある意味、愛おしさが先行して、辛い感じがあまりしないというものもあるかもしれません。

写真で言うと、色あせたセピア色という感じでしょうか。しかし、情緒はとても濃密にそこに存在しているということです。

とにかく、自分の幼い時のことを書くと、良いエッセイになる可能性が高いですね。

(時系列でみた自分)

さて、それらの、幼い頃のことを色々思い出して書き綴っていくと、たくさんのエッセイが出来上がってきますが、それを時系列的に並べると、自分の成長の過程が見えてきたりします。

(成長とはなにか)

さらに、その続きの人生を書き進んでいくと、自分史ともいえる、膨大な作品になるでしょう。一章、一章が、エッセイとしても十分鑑賞に堪えるうえに、全体としては、流れるような、人生の大河小説になっていくと思います。

ですから、大河小説もエッセイという小編の積み重ねであるともいえます。そして、そこには、自分の心の成長の記録が綴られているというわけです。

(幸せとは、感謝とは)

心の成長とは、何か？

それは、最初の段階は、いかに自分が幸せになろう、頑張って幸福になろうと、外に向かって働きかけることです。我慢したり、努力したり、頑張ったり、耐えたり、工夫したり、競争したり。しかし、本当の心の成長はその後ですね。外に向かって働きかけることでは、いつまでも、本当の幸せになれないとわかってからの第二段階の成長。それが本当の心の成長だと思いますが、その成長について、書いてみるということです。

例えば、自分の幸せは、自分の責任であり、義務であるということに気がつくこと、そして、感謝する幅や対象が広がっていくことでしょうか。

さらに、言えば、どのような人生も、だれの人生も、「私の貴重な人生」であり、それは「常に幸せに満たされている」ということに、本心で気付くのが本当の成長なのだと思います。エッセイを書き進めるというのは、その気付きを確かなものにしてゆく、とても秀逸な道の一つだともいえます。

そして、エッセイを書く作業は、そのような人生に対して、感動しなおすということになります。写真を取り直すような感じですね。感動を記録する。

そして、そのような、エッセイを書いていくと、自分の書いた文章に自分で感動して、時として、涙が流れたりすることもあります。それはそれで、素晴らしいことです。しっかり、涙を流しましょう。

でも、まあ、そのエッセイを読んで、他の読者も同じように涙するとは限りませんね。また、同じように涙してくれなければいけないと言うものでもありません。それで良いのだと思います。感動したり、納得するのは、その人の全人生をバックに行なわれていますから、その感度や深度は、個々人で全部違ってきます。

ですから、それらを全部満たすことはとても無理です。では誰を満たすのか？

対象は、自分ですね。語りかけているのは、結局は自分です。自分が感動すれば、それで十分ですし、最高作品だと思います。もし、自分だけが感動してしまって、「これではいけないのではないか」などという考えが起ったら、この項のことを思い出してください。

「自分が感動して、それが最高だ」ということです。

とにかく、自分が気に入る作品に自分のエネルギーを注ぐということが大切だと思います。

読者を無視しなさいと言うわけではありませんが、最大の読者である「自分」を大切に尊重しましょうということですね。自分は最初の読者であり、最終の読者です。

【403】 段落のつけかた

(段落で話の意図をまとめる)

ひとまとまりのことを言ったら、そこで、少し、間を空けましょう。人間の頭は、メモリーに言葉を並べて理解していきませんが、そのメモリーは例えば、電卓のキャッシュメモリーのように、書き込みや読み出しのスピードは速いのですが、あまり、容量が大きくありません。キャッシュメモリーに展開している単語や文章は、それを一旦、片付けなければ、次の作業に支障をきたします。

(間を取ることの大切さ)

よく、他の事を考えながら、小説などの文章を読んでいると、目だけが文字を追って、どんどん進んでいき、5～6行進んで、あるいは、もっと進んで、「あれ、全然読んでない」と元に戻る場合がありますね。

マインドは他のことを考えて、キャッシュメモリーを使用中ですから、文章の言葉を目が拾ってきてもそのキャッシュメモリーに乗せられない、つまり、処理ができない、理解できない。目は読んでいるが、「頭」は読んでないということになるわけです。

この容量は、これが、内容にもよりますが、だいたい5～6行くらいです。これを「キャッシュメモリー処理容量」だと言えば、その容量が一杯になる程度で、一段落した方が、理解度を上げるために良いということです。

具体的には、一旦、そのキャッシュメモリーに展開している単語や文章を、他の記憶域（日中記憶域）に運ぶと言う作業を「頭」にさせるためです。普通の言葉で言えば、内容を確認しながら文章を読み進めるといことです。その作業。

ちなみに、「頭」の中の「記憶域」は、この「キャッシュメモリー」と「日中記憶域」と「過去記憶域」の大きくわけて三段階あります。

これは、ちょうど、コンピュータで言えば、CPUメモリー（キャッシュメモリー）と、ハードディスクメモリー、と外部大容量記憶域の関係に当たりますね。

「演算装置」、つまり、人間で言えば「マインド」に近いところほど、アクセスは早く、容量は少ないということです。

少し横道にそれましたが、この、間を空けるということも、理解しやすい文章を書くうえでは、大切なことですので、少し気にしておいてください。

ただ、明治時代の夏目漱石や森鷗外あたりの文章を見ると、この段落にたいして、行空きをしていません。その理由は、おそらく、紙代が高価であったために、行間を詰めてページを節約していたのかもしれませんがね。

今は、豊かですから、紙を節約するよりは、より読みやすい配置を考えれば良いと思います。

このことを、横書きについて言えば、横書きでは、段落は、わかりやすく一行開けるのが良いのだらうと思っています。このエッセイ講座では、作品提出について、空き行は、文字数にカウントしませんから、段落のまとまりごとに、一行空けて書いてみてください。

もちろん、もっと、違ったレイアウトの仕方もあります。故意に意図があつて、詰める場合もありますし、逆に、空間を広く取る場合もあります。決まりはありませんので、作品に応じていろいろ工夫してみてください。

【404】 平易な言い回し

(自分の言い回し)

言い回しを大きく分けると、「書き言葉」と「話し言葉」に分けられます。書き言葉は、一般的には、事象の説明に向いていますし、話し言葉は、感情や気持ちの表現に向いています。

しかし、区分がそう決まっているわけではありません。電気製品やコンピュータの説明書やマニュアルは、書き言葉で書いてありますが、とても、分りにくいですね。

いっそ、話し言葉で書いてくれたらわかりやすいのに、と思ってしまうこともあります。例えば、「あっ、このスイッチを入れる前は、ボリュームは絞っておいてね。ものすごい音がするかもしれないから。」というように。

でも、そうすると、こんどは、柔らかすぎて、正確に伝わらないと言うこともあるのでしょうかね。

何かを説明するのに、ちょうどよい程度の「固さ」が必要なのでしょう。

説明するものにもよりますし、何を書くのかにもよります。

(難解な言い回し)

仕組みや状況が複雑なものほど、正確に表現しようとする、より難解な言い回しになりやすいですね。

「難解な」というのは、一つには、①「使用している単語が難しい」ということがあります。マニュアルなんかで、外来語が多用されていると、その単語の意味がわからなければ、字面は読めても、内容がさっぱりわからないということもありますね。

「難解だ」と思う理由の、もう一つは、②実は文章の意図が分からない場合が多いですね。何がポイントなのか分からない。だから、文章は分かるのだけど、いったい何が言いたいのか分からない。というものです。

(難しいことほど簡単な言い回しで)

せっかく文章を書いても、それがちゃんと伝わらなければ面白くないですね。ですから、難しいことを言いたい場合は、①使用する単語は、なるべく容易なものを使うということが、当たり前ですが、まず大切です。

②次は、意図をはっきり表示することですね。それは言わなくても分かるだろうと思っていると、読む人にはとても難解になってくるわけです。あるいは意図が後のほうで、分かるという文章も、難解な感じになります。

難しいことほど、簡単な言い回しで、言うことが大切です。それが親切です。

【405】 はやり言葉、若者の言い回し

(時代性のあるもの)

ファッションもそうですが、言い回しも、流行性のものがあります。定着するものもありますし、一過性のものもあります。

その時代を感じさせよう、あるいは、取り込もうとして、そのような言葉や単語を使うこともあります。

(雰囲気醸成)

「現代」をエッセイの中に入れたい場合は、若者のことばを入れたりすると、その時代が感じられやすいですね。若者は、新しい言葉を生み出したり、使ったりしていますから、それらをフォローすると、エッセイもそのような雰囲気が出せます。ただ、そのエッセイを長く後々まで楽しめるものにするのであれば、変化するかもしれない流行言葉を多く使っていると、すぐに、逆に色あせると言う懸念もあります。

10年20年書き貯めたものを、一冊の本にするとかの場合に、流行語は、良いアクセントになることもありますし、浮ついた変な感じになることもあります。その時代を特に反映させた話でなければ、つまり、いつ読んでも、その言いたいことが同じように分かるようなエッセイであれば、なるべく、普通の変わらない言葉を使用していた方が、長く価値が保てますね。

実はそう思って書いても、なかなか時代の変化が早いので、古い感じになってしまうこともあります。

意外に、古く感じてしまうものに、電気製品などがあります。

レコード、写真機、蓄音機、などは、書いたときは、最新の機械という感じで書かれたのだろうと思いますが、CD、カメラ、オーディオ、に変化していますから、逆に、古い感じがしてしまいますね。

あと、人の名前も、時代により流行がありますから、古い本をリニューアルで出版するときには、新しい名前に変えることがあります。

しかし、流行語が定着する場合もありますし、また、古い流行語や言い回しが、そのエッセイにぴったりであればもちろん、そちらを優先した方がいいでしょうね。

「サエてる言い回しなら、うざったいのより、もちろん、イケテルわけです」

これが、何年も先になっても、ちゃんと意味がわかるかどうか、それは誰にもわかりませんが。

【406】 くどい文章とは

(同じことを繰り返す意味)

どうしても、言いたい大切なポイントについては、言い方を変えて、何度も言うことも必要です。そうすると、同じ事を繰り返して書くのがその方法になります。読む人は、大切どころもそうでないところも、一様に、ざーっと通して読みますから、同じことが繰り返してあると、その部分が大切であると分ります。というか、印象が強くなります。

ですから、大切なことは、繰り返すのが一つの有効な方法です。繰り返し方は、続けて同じ文節の中で連続して言い換えたりしながら説明する方法と、エッセイの文章の前段階で、一回、中段でもう一回、最終にさらにもう一回と、分散していうこともできます。

なんとなく、書くのではなく、作戦を立てて書くと言ってもいいですが、そのためには、「言いたいポイントは何か」を自分でよく知っていて、さらに、「どのようにして伝えるか」を工夫しながら書くということです。

(主題と外れたこと)

言いたいポイントがはっきりして、伝える作戦ができているにも関わらず、主題と外れたことを思わず書いてしまうことがあります。横道にそれるということですが、横道にそれると、言いたいことが曖昧になってしまいやすいので注意しましょう。

読者は、これは、横道なのか、正当な道なのか、読んでいるときはわかりませんから、迷ってしまいます。ですから、司馬遼太郎などは、横道に入るときは、先に断ってから、書いていますね。

■「余談だが、この〇〇峠をタクシーで越えた時、・・・」

とかで始まる文章をいきなり歴史小説の途中に挿入したりしています。読者は、読んでいても迷わないですね。「これは、余談なのだ」と分ります。舞台上言えば、暗転してナレーターが出てきて説明するような感じですね。

司馬遼太郎さんくらいになると、もちろん、余談ではなく、それも、小説をより面白くするエピソードの一つを挿入するために機能していますが、読者は、安心して司馬遼太郎さんの道案内に従って、小説の世界を進んでいけるというわけです。

思わず、知らず、横道にそれた場合も、

「少し、横道にそれました。本題に戻ります」

と書けば、読者は、その一行で、「頭」が切り替わりますから、話の展開についていきやすくなりますね。

主題から外れたことは、あまり、書かない方がよいのですが、それを書くことによって何らかの効果を狙っているのなら、「外れたよ」とか、「戻ったよ」ということを、その時点であるべく明確にした方がよいということです。

ただ、文芸作品とかになると、暗転ではなく、フェードアウトや、重ねて進行させたりして、別の効果を狙うこともあります。ですから、横道にそれたらはっきりさせた方が良い場合もあるし、そうでない場合もあるということですが、少なくとも、著者自身は今どこにいるのか、それを読者にどの程度知らせたいのかを意識しておいたほうが良いということです。

(強引に結論を導こうとしている箇所)

人を説得するのは、難しいものです。自分の意見を言うのは、自由ですし、反発はあまりありません。が、ひとたび、これはこう考えるべきです。とか、あなたはこう思っているかもしれませんが、それは間違いですなんていうと、マインドは誰のマインドもすぐに反発します。

自分としての結論があれば、それを伝えるのは、エッセイの意図ですから、それをしっかり伝えなければなりません、「伝えること」すなわち、相手が納得することではありません。相手が納得するかどうかは、相手の事情によります。

相手には相手の事情があるのだということを、しっかり、自覚した上で、私はこう思います。あるいは、こう思いましたということを書くことが大切です。その場合、そう思う理由は、これこれですと書けば、なお、納得性が増します。

エッセイは、文学作品ですから、説明文のように、正確に説明しなくても、状況や会話や、あるいは、風景描写を使っても、その説明の一端を担わせることができますが、いずれにしても、読者の自主的な追随を待つという考え方で行けば OK です。しかし、強引に、自分の「結論」に持って行こうとすると、失敗する可能性が高いです。

といって、自信のない書き方を続けていても良くないですから、自信を持って自分の言いたいことを丁寧に、親切に伝えるということだと思えます。

【407】 心の温かさが残るエッセイ

(夢と希望に満ちたもの)

読んだ後に、ほのぼのとした温かい気持ちが残るエッセイなら、幸せな気持ちになりますし、また、次の作品も読みたいと思いますね。

では、どのようなものが、そのような気持ちになれるのかというと、「夢」や「希望」があるものです。

逆に、「夢」や「希望」が無いものは、読んだ後、暗澹たる気持ちになってしまいますね。

では、「夢」や「希望」とは一体何なのかと言えば、「将来、もっと、幸せになれる可能性」と言うことですから、そのような方向にエッセイが向いていれば良いということでしょうね。未来に向かっていくということですが、これは、過去のことを書いていても、そうすることはできます。

例えば、「過去にこんな大変なことがあって、それをずっと、後悔していたが、こう考えれば、それは貴重な経験だったと感謝できるような気がする」という文章があったとします。すると、そ

れは一応、過去のことをエッセイの対象にしていますが、実は将来の自分の「幸せ」に言及しているわけですから、未来にという方向を示しています。つまり、「夢」や「希望」を語っているのだと言えます。

(優しさの伝わるもの)

読んだ後に、ほのぼのとした温かい気持ちが残るエッセイ。もう一つのジャンルは、「優しさの伝わるもの」ですね。

ご存知のように、マインドは計算高い優秀な機械ですが、ハートと違って、マインドの働き方には、「優しさ」がありません。冷たさや厳しさはあっても、優しさは出てきません。

そして、「感動する」とか、「温かい気持ち」というのは、ハートの領分ですから、このハートに伝わるようなメッセージを送らないと、「優しい気持ち」「温かい気持ち」が伝えられないわけです。

では、どうすれば、ハートに届くような文章が書けるのかというと、これは、ちょっと工夫が必要です。

工夫のポイントを一言で言えば、「マインドは欲で働いているので、欲の無い状態で書く」ということになります。

マインドを使いながら、しかも欲の無い状態というわけですから、それは、「計算高い自分が居ない」状態と同じであると言ってもいいですね。

意識が、「自分の幸福」や「自分の得」に向かっているときは、それはマインドの領分ですが、「相手の幸福」や「相手の得」に向かっているときは、マインドは、働いてはいますが、「自分」が消えていますから、その分、ハートの出現が容易になってきます。

「自分」がどんどん消えていくと、文章はどんどんハートの的になっていきます。ですから、自分が消えれば消えるほど、自然に温かい、優しい気持ちが満ちた文章になっていきます。

(喜びの伝わるもの)

読んだ後に、ほのぼのとした温かい気持ちが残るエッセイ。

そのもう一つは、「喜びが伝わるもの」ですね。

この喜びというのは、宝くじに当たったとか、試験に合格したとかの喜びとかではなくて、その人の「欲」が消えて、あるいは落ちて、「幸福を発見した喜び」のような、精神的なものです。逆からいえば、「愛」を発見して、あるいは「愛」に触れて、そしてそれを感じた喜びと言えますね。

そのような「喜び」を伝えられると、受け取った人は、誰でも、一緒に喜べるわけです。

【408】 余韻の残し方

(全部言わない)

「余韻」というのがあります。読んだあとも、なんとなく、その雰囲気が残ったり、その感動が残ったりするものです。もっと、その余韻を詳細に観察してみると、それは、マインドがまだ、あれこれと、その後のことや、理解したこと、しなかったことについて、考えている状態だともいえます。

とても大きな感動をして、その余韻が残るというのもありますが、それも良く観察してみると、マインドが、「いったい、どういうことだろう」とか「ああ、なるほど」とか、まだ、そのことの周辺で活動しているわけです。その活動の余波が、再び、同じ感動なり、感激なりを発生してくるので、余韻があると言うわけです。

ですから、余韻のある文章を書こうと工夫する場合は、一つの方法としては、「想像力を最大限活用できるような状態で終わる」ということも出来ると思います。
全部を言うと、「興ざめ」になってしまうということの、正反対ですね。

例えば、ハッピーエンドの恋物語は、ハッピーエンドのところで終わっています。そこから先のことは、色々あるかもしれませんが、何も言わないわけです。それを言うと、蛇足になるということですし、それを言うと、せっかくハッピーな気分がそがれてしまうと言うのもあるかもしれませんね。

盛り上がったところで、ぱっとやめるというのが、良い余韻の残し方だと思います。
ついでに、間違えそうな「余韻」の残し方を言いますと、例えば、映画で言えば、ハッピーエンドの手間、5分で映画を打ち切るようなものです。
これは、「えっ、このあと、どうなるんだろう」と「余韻」のようなものが残りますが、良い感じではないですね。一番知りたいところを隠されたような、フラストレーションが貯まります。

確かに、どうなるんだろうと、気にはなりますが、それは「感動」の余韻ではないですね。「未完結」「疑問」に対して、マインドが執着した部分ですから、あまり、良い気分ではありません。フラストレーションと余韻は違いますので、間違えないようにしましょう。

(想像できることは言わない)

正しい、文学的な余韻、良い余韻というものは、想像できることは、あえて言わないということです。たぶん、それは、「感動」というものが、言葉にしたものより、自分の心にわきあがってきたものの方が本物ですし、それこそが、求めているものだからですね。

せっかく、心の中に感動が起っているのに、それを、「楽しいでしょう」「嬉しいでしょう」「泣けるでしょう」なんて、念を押されたのでは、返って、気分が冷めてしまいますね。
ですから、エッセイにおいても、淡々と綴ってきたものが、最後に「感動」を起こすくらいに波が高くなってきたら、もう、そこで、「ほら、波が高いでしょう」なんていわないで、そのまま、どんと心の中で崩れるままに自然の成り行きで行くのが、正解というわけです。

波を高める努力はしなければなりません、波が崩れるのを手助けしないということです。想像できることは、言わないということと同じです。

(感情を説明しない)

なぜなら、感情は、マインドが説明できるものではないからです。マインドが説明すると、必ず、どこか違ってきます。状況や、詩歌ならその感情を伝えることができるとしても、言葉をつらねて、直接説明するのは、言葉はあまりに、残念ながら、貧相なのですね。

でも、言葉なしではエッセイも何もものが書けませんから、言葉は大切ですが、しかし、言葉ですべてが伝わらない。

特に、「感情」は言葉にするのが、難しいですから、そのことを良く理解したうえで、その代わりの方をいろいろ工夫するということになりますね。

■それを聞いて、彼は、こぶしを突き上げて「よーしっ！」と叫んだ。

■夕日に赤く染まった顔で、彼女は、「うん」と小さくうなずいた。

■外は、冷たい雨が音もなく降っていた。窓ガラスに映った自分の頬に一筋涙が流れた。

感情を表す言葉を使わないで、行動や状況で、「感情」を間接的に説明するという工夫も一法です。そして、とても、興味深いと思うのですが、感情を説明しなければいけないほど、感情は良く分かるし、よく伝わるようになってきます。

もちろん、感情を表現する方法は、そのようなやり方がすべてではありませんので、いろいろ工夫してみてください。また、この工夫はとても楽しい工夫です。

【409】 形容句の位置を変えてみる

(かかりの問題)

良く推敲されて、練られた文章と、そうでない文章の見た目の差は、実はこの辺りにあります。形容句の係りの問題です。

■赤いリンゴ

■すっぱそうな赤いリンゴ

■紅玉という名のすっぱそうな赤いリンゴ

■最近お店でみかけなくなった紅玉という名のすっぱそうな赤いリンゴ

●リンゴという言葉聞いて思い出すのは、やはり、最近、あまりお店でみかけなくなった紅玉という名の、あのすっぱそうな赤いリンゴです。

★「あの紅玉という名のすっぱそうな赤い、最近、お店であまりみかけなくなったリンゴですね。リンゴという言葉聞いて思い出すのは、やはり。」

いろいろ係りが多くなってくると、それを整理しないと何だか訳がわからなくなってきました。整

理の基本は、修飾しているものは、なるべく近くに配置するという事です。
この基本をちゃんと守るだけで、随分綺麗な文章になりますから、是非、それは気をつけてみてください。

ただし、流れによっては、どうしても、この言葉を先にして、これを後にしたいという場合もありますから、全体の流れやバランスが優先することは確かですから、語句を並び替えたなら、もう一度でも二度でも読み直してチェックしてみてください。

基本どおりでない方が、何らかの味がかもし出されるという場合もありますから、基本を知ったうえで、それらをテクニックとして使ってみてください。基本を外すのも面白い効果が期待できる時もありますので。

例えば、上の★印は、会話文としては、●印の言い方よりも、とても自然です。逆に言うと、掛りを乱すと、自然な会話文になり易いといえます。

さらに言えば、「」（ト書き）の中では、係りを整えすぎると、会話としての力がなくなることもあります。いろいろ実験してみてください。

（否定形を使う危険性）

否定形を使うことにより、正確に物事を説明できたりしますから、否定形を使ってはいけないということはありませんし、否定形でしかいえないこともたくさんありますから、否定形を使うことは問題ではありません。

しかし、否定形は、マインドが理解するのはとても難しいので、よく注意して使わなければなりません。

特に長い文章で、途中で二度否定形がでてくると、いったいどこに掛っているのか、わからなくなって、ひいては、そのエッセイ全体がボケたものになる可能性もあります。二重否定はとてもマインドにとってはわかりにくいのです。

そこで、

- ①長い文章の中では否定形はなるべく使わない。
- ②否定の否定（二重否定）は複雑になるのでなるべく使わない。もし、使った場合は捕捉説明をするくらいのつもりが必要です。

（明解な指示語）

これ、それ、あれ、どれ、などの、「こそあど」ことば、一般には、指示語と言いますが、それらを多用すると、文章全体は短くすることができますが、意味が取れなくなった場合、あるいは、取り違えた場合、全体の意味が分らなくなって来ますので、もし、そのような怖れがある場合は、指示語を使わないで、現実の名詞や対象の言葉で、表現するようにしましょう。

また、「こそあど」言葉などの、指示語を一切使わなかったら、自分の考えがさらに明確になることもあります。実験に、書き上げた文章の中の指示語を全部、実の単語に直す作業を一度やってみてください。たぶん、もっともっと自分の考えがはっきりしてくると思います。

例えば、「それが大切です」と書くのは簡単ですが、しかし「それ」を説明しようとする、例えば、そこまで延々と述べてきたことを一気に要約しなければならないのかもしれないかもしれません。

要約作業は、「頭」を使う作業ですが、それをするによって、読む人にさらに良く分かるのであれば、それを書いた方が良いでしょう。

例えば、

- つまり、それが大切です。
- つまり、休息することが大切です。
- つまり、足を伸ばすことが大切です。

自分で文章を書いているときに、「それ」や「これ」と書いて、自分で一体どこの何を指しているのか分からないということは、まず、ありません。また、それを読み直しても、自分で書いた文章ですから、それが何であるかを忘れることもありません。

しかし、読む人が著者と同じように文脈を追えるかどうかは分かりません。ですから、その誘導のためにも、指示語を現実の言葉に置き換える方が多い場合が多いのです。

現実の言葉にちゃんと置き換える工夫を省略して、なんとなく、「それ」に逃げて、「きっと読者は良いことばを自分で補ってくれるだろう」と考えてはいけません。はっきりわかることについて、言葉を繰り返すのを省略するときだけ、「それ」を使うようにしましょう。「それ」とは指示語のことです。念の為。

【410】 ことわざを使う場合の注意

(ことわざの意味を確認する)

「ことわざ」「格言」「金言」などを文章の中に入れる場合があります。「引用」するわけですが、「まさに、『二兎を追う者は、一兎も得ず』ということになってしまいました」などと使います。ちょうどぴったりの良い表現ですと、長々と説明するより簡単に的確に理解できますから、とても重宝です。

ただし、これは、その引用した「ことわざ」の意味が、自分も読者も同じであること前提です。もし、違う意味でそのことわざが受け取られると、逆に話が混乱してしまいます。

ですから、意味があやふやなことわざは、良く調べてから使った方が良いでしょう。自分でも辞書を引かないと正確な意味が分からないようなことわざなら、それは、読者の中にも分からない人や、違う意味で覚えている人も居る可能性が高いですから、そのような、曖昧なことわざは、最初から使わない方が賢明だということになります。

例えば、「犬も歩けば、棒に当たる」の意味も、「幸運だ」というのと、「不運だ」と言う正反対の意味があったりしますから、紛らわしいことわざは使わないことです。

(ことわざの良し悪し)

ことわざを使う場合も、同じような内容でも、その場により適したものを選びましょう。同じような意味でも、その雰囲気は随分違いますから。

例えば、

「あはははは、じゃあ、それは、言わぬが花ってことね」

というのと、

「あはははは、じゃあ、それは、くさいものにはふたをしろってことね」
では、会話の雰囲気は全然ちがってきます。

(難しいコトワザ)

意味を取り違えそうなことわざも困りますが、難解なことわざを使ってはいけません。エッセイの中で、分からない言葉が出てきても、読者はたぶん辞書を引きながら読み進んでくれるだろうなどということを期待してはいけません。

ですから、難しいことわざなどを使うと、そのことわざの意味を説明する必要があります。もちろん、それをすることによって、本当に言いたいことの補助的な、しかも的確な説明になるのであれば良いですが、そうでなければ、限られた字数の中では、無駄です。難しいことわざを使うときは充分注意しましょう。

【411】 しっとりとした味わいのあるエッセイ

(落ち着いた心の表現)

「落ち着いた心の表現」・・・これは、係りの問題から正しく言いなおせば、「落ち着いた心の表現」ではなくて、「心の、落ち着いた表現」ですね。

「乱れた心か、ざわついた心か、どんな心か知りませんが、とにかく、それを、落ち着いて観察して、表現する」という意味です。「落ち着いた」は、「表現」に係ります。

その観察の視点なり、スタンスがどっしりしていれば、内容が、動揺した心であってもエッセイは、どっしりとして落ち着いて読めるものになります。

そのためには、ある書きたいテーマを持ったら、しばらく、熟成させる、心を落ち着かせるというのが、一つの工夫ですね。

きっと、熟成しているうちに、多面的に観察できたり、言葉も、洗練されたりするでしょうね。もし、その間に、違った視点が、一つでも、二つでも得られると、それは、エッセイをととても深いものにする可能性があります。熟成しているとそういうことを得る機会が多いですね。

(語尾の語感)

文章の落ち着きと言う点について言えば、語尾の果たす役割は意外に大きいです。語尾が長く丁寧だと、落ち着いた感じになり易いといえます。

「なになにだ」調よりは「です。ます」調の方が落ち着いた感じになります。

逆に、アップテンポにしたい場合は、語尾を短くするとそうなり易いです。

■目を丸くした彼。噴き出した私。

みたいに、テンポを強調したいときは、語尾はなるべく短いほうが、調子はあがります。

■ 「おなかは？」 「ぺこぺこ」 「じゃ、行く？」 「嬉しい！」

と、会話でもそれは出来ます。
文章のスピードを速めたり、遅くしたり、内容によって、いろいろ使い分けてみてください。

(心地の良い人生の見かた)

人生を見る目が、ひねくれているいたり、まがっていたり、すねていたり、不平不満があるようだと、それがエッセイに現れ易いです。そして、そのような考えが現れたエッセイは、たとえどんな美辞麗句が並んでいても、読んでいて楽しくないですね。

ですから、読んでいて楽しいエッセイを書くためには、自分の見方、感じ方を磨かなければならないと言うことですが、これは言うのは簡単ですが、具体的にどうするかということになれば、なかなか難しいですね。

でも、その具体的な方法の一つとして、いままでお話してきたように、エッセイをいろいろ工夫しながら、チェックしながら、書くという良い方法があるわけです。
つまり、自分で書いたエッセイを自分で吟味して、人生の見方や感じ方をより豊かに、より明るく楽しいものにしていくように努力するという地道な作業を繰り返すことですね。

つまり、逆に言えば、自分でネガティブなことを書いたり言ったりしている箇所について、徹底的に、調査、分析、解析する、そのように書いた自分自身を理解するということです。

なぜ、自分はこの点をこのようにしか観察したり、考えたりできないのか？

その理由や仕組みをしっかりと把握する。それを深く見つめる。すると、そこには、必ず、何かあるはず。不要になったプログラムがあるかも知れません。例えば、すぐに不安に思うプログラム、恐れのパラダイム、自慢したいプログラムなどなど。

それらのプログラムは、人生のどこかで学習したり、獲得したものです。それを見直すのが、より柔軟な視点を獲得する一番の早道になります。また、それができると、エッセイが、明るく軽い、爽やかなものになるだけでなく、毎日の生活も、明るく爽快になっていきます。

「楽観的になりなさい」といっているのではありません。

単に、正しく、物事を見ましようということです。

たぶん、正しく見るだけで、大方の不要な不安や怖れは消えてしまいます。

そのようなよりクリアーな視点を、獲得したいわけですし、必要です。

そのために、エッセイを書いて、自分でチェックするのだということですね。

エッセイは、とても良い「道」だと言えます。

【412】 引用文の使い方

(効果を良く考えて)

ことわざのところでもちょっと触れましたが、何かを引用するときには、その効果を良く考えて引用しましょう。

時に、自分の言っていることを、正しいのだと主張したいがために、先人が同じ事を言っているのを引用して、その正当性を強調しようとする場合があります。

しかし、引用文した文章の意味を取り違えていたりすると、エッセイ全体が意味不明になってしまいますから、その辺りは、慎重にしてください。

また、説明を補強しようとして、引用したことが、返って説明を混乱させることになることもあります。

もともとの説明で、十分説明されていない場合はとくにそうなり易いです。ですから、引用がなくても、意図は十分説明できていると言う状態で、「引用」を持ってくるのが正解ですし、そのような「引用」の仕方であれば、その言葉が例え難しい言葉であっても、「ああ、なるほど、この言葉はよく知っているけど、そういう意味だったのか」とさらに深く意味がわかります。

(著作権)

著作権について、概略の説明をしておきます。文章を書けばその人に著作権が自動的に発生します。そして、その著作権は、普通、死後50年有効です。

夏目漱石や芥川龍之介は、死後50年を経ていますから、その作品をどのように商業ベースで利用しても著作権に抵触することはありません。著作権が消滅しているからです。

ですから、全集など、死後50年を期に発刊されるものが多いですね。

著作権は、財産権ですから、譲渡したり、売買したりすることができます。

また、著作権とよく似ているものに、出版権というのがあります。著者は、著作権を譲渡しないで、出版社に出版権だけを与えるのが、通例です。

この出版権について言えば、慣行で、それは、単行本には及ぶが、文庫本はまた、別の出版権であるとされています。

(引用・出典・礼儀)

他人の作品から、一部を「引用」することはよくあります。その場合、その出典を明記して、誤解の無いような引用をすることが礼儀ですね。

言い回しを変えたりするのは、もってのほかですが、たとえ句読点でも変えてはいけませんね。それは、引用する人の礼儀だと思います。

(正確に)

引用する場合は、正確に引用するよう心がけなければなりません。一部を引用するので、前後は省略されます。すると、文脈からみれば、そうは言っていないのに、その部分だけ見ると、例えば、まったく逆のことをいっているような引用になることもあります。

そこまで、極端ではなくても、引用すれば必ず、何パーセントかは本文より外れてしまいます。ですから、それを正しく補う説明とかが必要だと思います。本来なら、著作権があるので、無断で引用してはいけません。

正式な手続きを言えば、「これこれこのような形で、貴殿の作品を私の文章に引用しようと思いま

すが、よろしいですか」と著者に了解を取るのが筋でしょうね。でも、それも煩雑ですし、商業ベースでなければ、引用も大目にみられているようです。

しかし、ネット環境が進歩してくると、コピーや通信の状況も、依然とは違ったものになって来ています。そのような環境変化に著作権の考え方がついていないのも現状ですね。しかし、基本は、書いた人の著作権を尊重するということに違いはありません。

【413】 上手く書けないところの処理

(場所を変える)

書いていくと、どうしても上手くかけないところが出てくる場合がありますね。何度書き直しても、すっきりしない、あるいは、ますます悪くなる。いったいどうしてそうなるのだろうと悩むことになります。

今回は、そんな時の方策をお話しします。

何度書き直しても、すっきりしない、ぴったりしないというときは、一つの方法としては、思い切って、場所を変えてみるという方法があります。

もっと、前の方にもってくるとか、もっと、後の方にもってくるとか、その段落ごと、書く位置を移動させてみるということです。

すると、「ああ、この場所で言いたかったのだ」とちょうどぴったりの位置を発見できることがあります。

(言い方を変える)

位置を変えてみても、なかなか上手くいかない。やはり、元の場所で言うことだという場合は、今度は、その言い方を変えてみるという作業をしてみましょう。

言い方を変えるというのは、元の文章を推敲するのではなく、言う立場を変えても見るということです。

誰かに言うように言ってみる。あるいは、独り言のように、あるいは内証のように言ってみる。疑問形で言ってみる。逆のことから言ってみる。

とにかく、文章の骨組みを一旦解体して、新たに構築してみる。

それで、上手くいく場合もあります。

(削除する)

それでも、なんだか、このセンテンスは上手くいかないと言う場合は、もう、仕方ありません。ばっさり削除しましょう。

きっと、そこで言わないでも良いことを一生懸命言っている可能性があるのからです。その場合ばっさり削除する。すると、全体が途端に風通しの良い、すっきりしたエッセイになることもあります。

思い切って削除するというのも、案外、良い方策です。

【414】 作品の磨き上げ

(朗読してみる)

エッセイは、目で読むものですから、声に出して読むことはあまりありませんが、声に出して読むと、意外に難点を発見しやすいですね。

使っている語句とかではなく、流れがとても分かり易くなります。

ですから、是非、完了する前に一度は声に出して読んでみてください。

また、最近では、点字に翻訳されるものもありますので、そのような場合は音に出して、はっきり意味がわかるような書き方が、より親切です。

また、それは、目で読んだ場合も、より分かり易くなります。

(身近な人に読んでもらう)

自分で読むだけでなく、チェックもかねて、身近な人に、目を通して貰えばさらに磨かれます。

(批評を聞く)

出来上がったエッセイを身近な人に読んでもらうのは、とても楽しいことです。「ほう、今度はどんなのができたの？」と興味を持ってくれてる人ならなおさらです。

しかし、エッセイを読んでもらうというのは、誉めてもらいたいからではなくて、より良いエッセイにしていきたい、さらに磨きたいからです。ですから、たとえ、もし、厳しい批判が来ても、当然ですがありがたく素直に聞く必要があります。

その批判に応じて手直しするか、しないかは、また別の話ですが、とにかく、どのような批判でも、それはとても有効なヒントになりますから、しっかり、聞きましょう。

しかし、読む人はそれぞれ個性があって違いますから、Aの人はBの人とは違うことを感じますし、感想やコメントも違います。ですから、誰にも良いように書くことはできません。また、そうする必要もありません。

極端に言えば、だれからも誉められなくても、自分でこれが良いと思っているのなら、それで良いということでもあります。

その、自分のセンスを曲げる必要はないということと、さらに磨きをかけるために聞くというのは、矛盾するようですが、自分が前進していれば、常にちゃんと両立します。

【415】 心を込めた最終チェック

(あらゆる人になってみる)

さて、いよいよ、最終チェックの段階になってきました。

一旦文章を公開するとなかなか直せませんから、完成する前にもう一度、チェックしてみましょう。

チェックの十戒を思い出してみてください。あるいは、自分で作ったチェック項目でチェックしてみましょう。

そして、それが出来たら、あらゆる読み手になって、もう一度読んでみてください。

(愛が発信できているか)

エッセイを書くことによって、「愛」が発信できていれば、それは大成功です。「愛」といったら難しいですが、そのエッセイを読んだ人が、幸せな気分になったり、元気が出たりするようなエッセイなら、それは「愛」を発信していると言えますね。

(将来の自分も嬉しいか)

そして、一番大切なチェック方法は、「将来の自分がこのエッセイを読んで楽しいかなあ。嬉しいかなあ」というものです。

誰かが元気になるだろうかというもの大切ですが、それはしかし、結局自分ではない、多くの不特定の人ですから、はっきりと分かるものではありません。多分、こうだろうという想像の世界です。

ですが、自分なら、自分のことですから、割と好みやセンスが、はっきりしています。将来の自分を思い描いて、その自分がエッセイを読んでいると想像します。

その時、楽しめるか？ それをチェックしましょう。

そして、それが、大丈夫、OKと確認できたら、これでチェックは終了です。

ペンネームを入れて、また、一つ作品の「完成」です。

そして、また、一步、「前進」したわけです。

(宝彩有菜)

(おわりに)

エッセイ講座ということで、4回に分けて、書き方のヒントやコツなどあるいは、チェックの方法などをお話ししてきました。

中には、宝彩有菜が、実際に、使っている執筆十戒なども入れて具体的に説明してきました。

しかし、テキスト本文でも何度も言いましたが、エッセイの書き方はこうでなければならないと言うものは何也没有ありません。それだけに、自由度も、創意工夫の幅も、広いわけです。

個性が十分に発揮できる分野でもあります。

是非、このテキストのヒントを参考に、ご自分であれこれ工夫しながら、より良いエッセイを書き続けてみてください。

量を書くことによって、必ず技術は付いて来ますから、是非、そうしてみてください。

私自身も、まだまだ、途上ですので、今、時点で、考えたり工夫したところを最大もらさずテキストにしたつもりではありますが、決して、これで全部ではないと思います。

不足したところ、至らぬところも多々あると思いますので、是非、ご自分でご自分のやり方なり、書き方なり、チェックのしかたなりを編み出していただくようお願いいたします。

エッセイを書くことで、生きる喜びを見つけたり感じたり、そして、より豊かな人生を心から堪能されるであろうと確信しています。

宝彩有菜

(C)All copyrights reserved Alina Hosai 1998-2005

◆宝彩有菜の「エッセイ講座」のHP

<http://homepage3.nifty.com/hosai-pj/essay/memb-index.htm>